

おかやまアーツフェスティバル2023

# 岡山市民の文芸

第55回岡山市民文芸祭受賞作品

# 一般の部

## 【現代詩】

◎岡山市長賞

### 針

石井佳子

久しぶりに浴衣会ゆかたがあった  
少女にかえり色とりどりの浴衣を着て  
その時 友の袖つけのほころびを見つけた  
いつも手ばなさない針と糸  
役に立った

楽しんで帰宅しふと小物入れの針を見つめた  
浮かんできたのは  
オノ・ヨーコさんのブロンズ像  
「忘れなさい」というタイトルの作品だ  
板の上に一本の細い針が立っているのみの

針はどうでもいいものではない  
他を傷つけるかもしれない  
一本でも足りなかつたら  
捜さなければ……

針が傷つけるのは肉体だけではない  
針のあることばが心を傷つける  
ネット社会の今

互いに傷つけ合っている  
ヨーコさんが示す一本の針は  
傷みに耐えている人のようにも見える

「忘れなさい」とは  
どんなメッセージなのか  
私の中が ぐるぐる ぐるぐる

浴衣をたたみながらひと針ひと針を思った  
そう 一本の針には希望がつまっている  
とれたボタンを付け直し  
破れた服をつくろう  
開いた傷口を縫いあわせることもできる

二千年の昔から使ってきたもの  
ふしぎな道具なのだ  
針の 銀色の  
美しさを  
じつと 見つめた

夏を仰ぐ

岩藤 由美子

虫かごと柄の長い虫とり網を  
手にした

少年とその父が  
辺りの木立を見上げている  
私に夏が来た瞬間だ

親とも子とも  
蟬とり体験のない私は  
どこか飢えている

少年の澄んだ瞳は  
空に近い枝の葉に止まっている  
アブラゼミを

素早く見つける

〈お父さん、もうちよつとこつちに来て〉

〈お父さん、その網が

気にくわないんだったら

僕のを使えばいいよ〉

父と子が並んで見上げる  
頭の角度を  
いとおしく思う

この世にいなかった父母と

夏の森に入ること

もう私にはない

大きくなった子たちと

並んで虫とり網を

持つこともないだろう

少年と父が羨ましいのか  
いいえそうではない

彼らもそれぞれに

今を脱皮してゆくのだ

私の瞬間も彼らの瞬間も

ただ過ぎてゆく

私の心の網に飛びこんできた  
今日の美しい時間は  
そのことを忘れさせるのだ

父の愛した花の色

岡 由美子

父の愛した花の色  
それは グラジオオラスの緋色  
白や黄やピンク色ではなく  
花壇には なぜか緋色だけを植えた父  
初夏の光を浴びて 目を射る緋色が  
強烈だった

父の愛した花の色  
それは サルビアの赤  
夏の盛りに 畑一面真っ赤なマスとなり  
青空の下で 燃え立った

父の愛した色  
それは ホオズキの朱  
勤務先の盲学校で ホオズキと出会い  
朱いハート型の実の虜となった  
一本の苗を 数百本にまで増やし  
ホオズキ畑を作ってしまったほど夢中になった  
実の朱と 葉の緑とのコントラストが  
秋の日に映えていた

五人姉妹の長女だった母のもとへ  
婿養子として迎えられた父  
明治生まれの厳格な祖父母に仕え  
忍の一字だった姿が 目に焼き付いている  
生涯 家の長になることはなく  
バトンは 私の祖父から兄へと渡った  
皆から 判で押したように  
やさしい人 穏やかな人 寡黙な人  
そう評され続けて 父はこの世を去った

そんな父の愛した花の色  
緋色 赤色 朱色

今にして思う  
あの色は  
父の心の奥にたぎっていた叫びだったのではないかと  
内に秘めた  
真の強さを映した色だったのではないかと

総身に残ったありったけを

山本照子

一週間に一度冷蔵庫の中を総点検する  
ハム かまぼこ ピーマン  
なすび たまねぎ 鶏肉  
空っぽのように見えたが案外多い  
これらのありったけを使って  
見たこともない  
新メニューを考えようと  
私は奮い立つ

後期高齢になった今  
自分の総身を時々点検する  
まず頭脳は  
ほどほどにボケて桃源郷に暮らしている  
耳は蝉の鳴き声のような音をたてながら  
はるかな宇宙と交信をしている  
手の指は突っ張り足もよろよろとはするが  
共に現役である

私の今の幸せは  
すべてが平均して衰えたことで  
決定的に失ったものはなにもない  
この幸せを舌に転がしながら  
家族の御飯を作り  
社交ダンスに興じ数独を楽しむ

近い将来もし歩けなくなったら  
夏目漱石や太宰治の世界と  
再会するのも悪くはない  
パンについた青カビから  
ペニシリンが発見されたように  
古びた懐かしさの中に  
最先端は身をひそめているのだから

そのうち  
本も読めなくなる日がくるかもしれない  
でも何も心配することはない  
冷蔵庫に残ったすべてで  
新メニューを作るように  
総身に残ったありったけを駆使すれば  
第六感を驚かすような  
新しい世界が開けるに違いない

オープンガーデン

三村 和明

十日間のイベントの過ぎた庭には  
チューリップの花弁が散っている  
私は一枚一枚丁寧に拾う  
雨の日は貝になり  
晴れるといっせいに開いて  
人々を楽しませた五百本の花達  
私は彼らの間に埋もれている  
「賛辞」や「感嘆」の言葉を  
ホストだけの特権として  
すくい上げふところにしまう  
これさえあれば  
お金も名誉も美食もいらぬ  
死にたくなつた時でさえ  
取り出すだけで生きていける

子どもの頃から  
暗くて無口な男だった  
人々を喜ばすことなどできないと  
母は死ぬまで思っていたに違いない  
母が生涯かけて守り抜いた庭を  
受け継ぎ育て続ける  
母は大勢の人達に囲まれた私に  
驚いているに違いない

年々さびれゆく地域で  
人々のつながりが危うくなる社会で  
束の間のやすらぎを提供する  
社会に何の貢献もできなかったが  
三打席まで凡退した打者が  
最後に殊勲打を放つように  
どんなに落ちぶれようと  
この庭だけは輝かせる  
私の名のオープンガーデンが  
私の死と共に終わっても  
「花咲じじい」の伝統を  
この地に根付かせて  
胸を張って母のいる所へ行く

【短歌】

◎岡山市長賞

朝ぼらけ観蓮節の花芯にははや蜜蜂のおとづれのあり

前原 和子

◇岡山市教育委員会教育長賞

失禁せし畳にしるく隈のこる逝きたる夫の形見となりて

児島 みつゑ

口元を固く結びて手をひらく天使の羽もち翔べよ曾孫よ

松元 慶子

眠る子のかたはら近く二つ三つ重ねおきたる三角積木

大西 貫也

取り崩す生家の隅の天井に吾の貼りたるアトムのシール

西尾 照常

【俳句】

◎岡山市長賞

すつぽりと備前平野を蝉時雨

平田 千恵子

◇岡山市教育委員会教育長賞

千羽鶴嘴揃へ原爆

足立 十古

真直ぐなる風一本の今年竹

松尾 佳子

道ゆずる人の会釈と香水と

平元 薫

盤上に一手の響き灯の涼し

原田 千恵子

【川柳】

◎岡山市長賞

生き抜いた顎だ確かな咀嚼音

遠藤 哲平

◇岡山市教育委員会教育長賞

真つ白い心で読んでいる「ハイネ」

久保 早百合

色褪せた絵本わたしの遊園地

吉田 早苗

ノスタルジ―青い運河を遡る

安原 博

われは癒え仰臥漫録読む二度

前原 和子

## 【随筆】

◎岡山市長賞

### フーテンのかっちゃん

横井環

青草が伸びた古びたプランターの角に、小さな生き物が止まっているのを見付けた。夫を呼んで顔を見合わせた。「何処から来たんじやろう」。思いがけずこの日から、二人と一匹の暮らしが始まった。その正体はアマガエル。「かっちゃん」と名付けて呼んだ。周りをアスファルトに囲まれた一軒家の片隅に、彼はどうやって辿り着いたのだろうか。何者かを通り掛かりに置き去ったのかも知れない。あるいは、カラスにうつかり見付かって、啜えられ、一緒に空を飛びながら何らかの拍子に落っこちたのか。以来、夕方の水遣りを催促するように「ケケツ」と鳴いて居場所を知らせてくれた。彼に会えなくなる冬眠期を三回程た夏に、私達は一軒家から引越した。

トラックに鉢植えやプランターを次々と運び入れながら、かっちゃんを探したが確認ができないまま慌ただしく新居に移った。数日が経ち、紫色の花を付けるゼラニウムの葉の上で糞をしている最中の彼を見付けた。餌に困る事もなさそうで、その元気な様子を見届けた時の嬉しさと、安堵感を今も忘れない。

ある日の事。ベランダに落ちた枯葉を拾おうとしたら、タイルの色にそっくりに体色変化した彼だった。驚いて尻餅をついた。どうやら棲家を変えて二階に上がって来たようだ。以来、普段はベランダの床下で暮らし、定期的にタイルの継ぎ目の隙間から現れて、小指半分ほどの上半身を無防備にさらけ出しては日向ぼっこをしていた。彼の熱中症を心配した夫が台所にあった透明のトレーに水を張り、置いてやる優しさを見せた。突然の異物を警戒しない訳がない。床下に引込んで姿を見せなくなってしまった。息を殺してベランダを覗き見る日々が続いたある晩に、彼がトレーの中で手脚を伸ばしている姿を発見した。夕方に替えた水は湯に変わっていただろう。夫と二人で「いい湯だな、ハハハン♪」と歌ってハイタッチした。

そんな愛らしいかっちゃんが今年はいない。調べてみるとアマガエルの寿命は七、八年らしい事が判明した。計算どおりなら、彼の命が尽きる頃だ。毎年の常連客のドタキャンを受けたアマリスの葉は張り合いもなく寂しそう。彼の居ない庭全体がしょぼくれていた。

私達にとって、かっちゃんの見守りは日課であり、癒しそのものだった。花の蜜を求めて集まって来る蜂から彼を守ろうとして、ホウキで蜂を追い払い、逆襲を受けて逃げまどった事は懐かしい思い出のひとつだ。ご高齢になった彼に、奇跡的に相棒が見付かって、一緒に旅に出たというシナリオで、二人と一匹の暮らしを完結させる事にした。

人生百年時代の到来だ。夫と二人、人生の道標を探しながら、時に駆け足で、時に立ち止まりながらも肩を並べて生きていこう。

かっちゃんの旅の無事を祈りつつ、アマガエルの寿命が十年時代になるよう願ってやまない。

## 電話の向い方

石垣明美

用事でM子さんのお宅に電話をかけた。携帯電話にかけるか、家の固定電話にかけるかで迷った。携帯にかけると、もしも彼女が外出中ならその邪魔をすることになるだろうし、家にいるなら携帯を持ち歩いていなくて着信にも気が付かないだろう。その点、固定電話なら出かけ先の彼女の邪魔をしなくて済むし、家にいるなら電話の音に必ず気が付くだろう。そう考えて固定電話にかけることにした。

トゥルルル、トゥルルル。「はい」。男性の声だ。一瞬、戸惑った。携帯なら必ず本人が出る。そうだが、そうだが、そうだった。固定電話とは、家族が出てくることもあるものだった。声の主は彼女の夫さんだろう。私が名乗るとすぐに妻への電話だとわかったように「ちよつと、お待ちください」と言つて、受話器を電話台の上にゴロリと置く音がした。ガラガラガラ、スッスッス、シャーツ、トットトット、ガラガラガラ、トットトット。いくつもの戸を開ける音や、足音らしきものも聞こえる。どこまで行くのか。しかし、なかなか彼女は出てこない。捜し歩く音はまだまだ続く。ガラガラガラ、スッスッス、トットトット、シャーツ、トットトット。何分が経過しただろう。ものすごく広い家のようにだ。

だんだん申し訳なくなってきた頃、足音が近づいてきて、ゴトリと受話器を持ち上げる音がした。いよいよよか、と思つて息を吸い込んだが、聞こえてきたのは夫さんの声であった。「あー、車がないのでどこかへ出かけたようです」と言う。夫さんに何も告げずに「機嫌で車を運転して出かける彼女の様子を想像して、くすくすと声を出さずに笑ってしまった。夫さんは家の中をあちこち探しまわってくれたのだろう。ダメ押しで駐車場の車を確認したのに違いない。なのに、妻の行動に驚いている様子も不機嫌な様子もなく、ごく普通の日常といった口ぶりである。老年期に入った穏やかな夫婦ののどかな暮らしが伝わってきた。

こちらから再度電話をさせていただくこととして電話を切った。

家族に何も言わずに出かけたのだからそう遠くには行っていない。小一時間のうちに、もう一度、電話をかけた。数回のコールのちに出てきたのは、再び夫さんである。私だとわかるとすぐに「はいはい、ちよつと待ってください」と言つて、ゴロリと受話器を置いて妻を呼びに行った。ガラガラガラ、スッスッス、シャーツ、トットトット。やはり大きな家らしい。履物を履いたような足音がするのだから、土間や離れがあるような日本家屋なのかな。遠くで「でんわ〜」という夫さんの軽やかな声が響いている。「はいはい、〇〇さんかな」と私の名を言いながら近づいてくるM子さんの声。ゴトリと受話器を持ち上げる音がした。「はい、おひさしぶりい〜」明るい声が耳に飛び込んできた。

## 魔法のおにぎり

時 實 育 代

「はい、夕食でーす！」

配膳担当者が、ベッドに備付けのテーブルにトレイを置いて下さる。

「食欲が湧いてくるように、今晚からおにぎりにしておきましたよ。」

掛けてあったラップが外されると、霞んだ長方形のお皿の上に一口大の三角おにぎりが三つ、行儀良く並んでいた。昼食は、お茶碗に盛られたご飯が全く食べられなかった。前日に受けた角膜移植手術が私の心を乱し、パニック発作と38度の発熱を招いたからだ。おかずをほんの少し口にただけで、艶やかなご飯粒に触れてもいけない。それなのに、もう夕食がやってきた。食欲は湧かないが、食べなければ元気も出てこない。複雑な思いで、目の前の夕食をポーツと眺めていた。その姿は、幼い頃のいとこ姉妹に重なってくる。

私が七、八歳の夏休みに、栃木県から叔母と娘二人が遊びに来た。日頃は滅多に会えない身内に、母と祖母は心を込めて持て成す。だが母と叔母は姉妹だけあり、積もる話に夢中である。気を利かせた祖母が軽い夕食にと、俵形のおにぎりを作って孫三人の前に置く。丸いお皿に二つずつ並んだおにぎりで、早速パクついた私。ところが、いとこ姉妹は各自のおにぎりを哀しげに見詰めるだけで食べない。心配した祖母が二人に

「お腹、すいてないの？」

と優しく聞いたところ、

「ううん。おむすびが大きくなって、お口に入らない…。」

これには大口を開けて食べている私も閉口し、祖母は必死に笑いを堪えていた。暫くして、いとこ姉妹の前には三つずつ、海苔に巻かれたちっちゃなおにぎりが運ばれてきた。サツと二つの手が伸びて、おにぎりは二人の小さな口へと吸い込まれていく。

その時の幸せに満ち溢れた二つの笑顔は、数十年経った今でも忘れられない。

「そうだ。私の目の前でも、三つのおにぎりが出番を待っている！」

塩味も海苔も無い、ただの「おにぎり」。しかし私には、食欲を引き出してくれる目にも可愛い「魔法のおにぎり」だった。その日はスプーンで少しずつ崩しながら食べたが、翌日からはお箸でつまんでパクツ。配膳担当者にも、誇らしげに

「完食でーす！」

主治医の先生からは

「入院して来た時よりも、元気になったみたいやなあ。」

と、呆れさせてしまうほどで

「あの時は、ヨレヨレでしたから…。」

と、笑顔で答えられる余裕も出てきた。退院日の前日までおにぎりは続き、夕食で最後の一個を口に入れた時には涙腺が緩み、天然の塩味が付いていた。そんな一口大の三角おにぎりは難しいが、祖母が握っていた俵形の海苔巻なら作れそうだ。「魔法のおにぎり」で、身も心も元気にしてやりたい。

## 半分半分

皆木恵子

「麺類がお好きだそうで」

そう言われて、夫が知人宅から戴いてきた木箱入りの「麺」。箱の表に大きく「麺」とだけ書いてある。中身がうどんなのか、素麺なのかはたまた日本そばなのかはわからない。裏表記を見る前に「当てっこしようか」とわたし。夫はすかさず自分の好物の「日本そば」と答えた。たぶん願望もあるのかもしれないが、対するわたしは「ソーメン」と答える。「もしもあなたが外れたらお風呂掃除をよろしくね」ということで中を開けてみたら、おやまあ、日本そば半分と冷や麦半分の白黒セットだった。したがってこの勝負は引き分け。

その日夫は風呂掃除をすることもなく、好きなそばを堪能し、上機嫌だった。

そんな健康そのものに見えた夫の心臓に疾患が見つかり、突然いや応なしの大手術を受ける羽目になった。予期せぬ出来事である。

長時間の手術に耐え、ひと月余りの入院生活を終えてこの七月に帰宅した夫はまだ痛みを抱え、日々飲まざるをえない薬の山にため息をつきながら、これまでとはまったく異なる生活を強いられるようになった。特に塩分制限は厳しく、好きな日本そばのタレも当然薄め。付ける量も少しだけ。食べる量はこれまでの半分以下といっている。わたしも手を替え品を替え、食事の工夫をしているつもりではいるが何しろ小食とあつては体力がつきにくい。以前と比べるとかなり痩せている。わたしの苦手な風呂掃除などやってもらえるのはとんでもなく先のことになりそう。

基本的には動きたい人なのに車の「運転」も禁じられているので当然わたしがアシとなって動く。ひと回り小さくなった夫の息遣いを横に感じる度に込み上げてくるものがある。

「丸の坂を越えるのは大変と聞いてはいたが本当だね」と、ある日夫がしみじみ言う。そう夫の年齢は七十九歳。あと少しで八十代に突入する。今までは人より元気で大した病氣もしていない。走り続けてきた分主たるエンジンが悲鳴を上げたのだろう。

夫の鎖骨の下中心からみぞおちにかけて、まだ生々しく巨大ムカデのような傷跡がある。心臓の血管バイパスを二箇所も造ったという。「食事の量はこれまでの半分のつもりで出してくれ」と夫は言うがつついあれこれ出してしまふ。今が旬の岡山の桃も「一つは無理だ」と言うので「じゃあ半分」とわたし。お菓子は「一口でいい」と夫が言えば「では半分ね」と一つを分ける。

幼い頃、二人姉妹のわたし達に母がよく「一つしか無いモノは半分こにして食べなさい」と言っていたが、そんな半分こを今わたしと夫がしている。それはどこか懐かしく温かで、東の間安らいでいる自分がいる。

「何もかも半人前のことしか出来なくなつて悪いナ」とある日、夫がボソツと弱気な一言を吐いた。自分も同じ七十代、気力体力共に落ちている。慰めというより真実の意を込め

「半分と半分を併せりゃひとつよ」と応えた。

## 愛情の質

二土山 郁乃

猫が城主になる時代だ。犬派と猫派。どちらの気持も解るが、昨今の猫人気をみると、つい犬の肩を持ちたくなる。どんな動物にせよ愛情を注ぎ共に暮らせば、かけがえのない特別な存在としていつまでも心に残るものだ。

二十年前、父が急ぐように亡くなり、その一周忌を待たずに老齢だった父の愛犬も逝ってしまった。父と愛犬の写真の前にした私達家族は悲しみを深くして「もう犬は飼わないことにしよう」と決めた。

それから私の心身に不調が始めた。食事の味がしない。日課の散歩に出る気もしない。外で犬に会うと涙があふれるうえに、テレビや雑誌でも犬を見ただけでそうなるから気晴しもできない。これがいわゆる「ペットロス」というものなのか。不調もさることながら、別の不安が私を苦しめた。父が亡くなっても、これ程の変化は起きなかった。これはどうしたことだろう。親よりペットの方が嘆きが深いとは、人としてどうかしていないか。

自責の念に駆られた私は、世情に通じた女友達に相談した。彼女は私の訴えを否定も同調もせずただ静かに聞いていたが、やがて両断の一言を発した。

「それはね、愛情の質が異なるのよ。」

彼女の説によると、およそ人間関係はお互いのやりとりで成り立っている。親子であればそれは繁く深い。時には感情の行き違いもあるだろう。しかしペットへの愛情は無条件にこちらが注ぐことだけで満たされている。その対象が失われた時、愛情は方向を失って苦境をきたす。加えて人に比べて法要や諸事に気を張ることが少ないペットだ。悲しみだけに浸るわけだから大きく感じるのも無理は無い。異なる質は比べて語るものではない。

淡々とした彼女の説明は私を納得させた。心にあいた穴に何か「すん」と納まるのを感じ、しばらくすると私の不調は治った。これからは父にもその愛犬にも、質の異いはあっても変わることもなく慕わしい愛情を教えてくれた感謝を伝え続けよう。ようやく心穏やかに父と愛犬の写真に合掌することができ、その後数年の歳月が流れた。

ある日唐突に母が、

「保護犬が飼いたい。」

と言いだした。

「もう飼わないと言っていたのに…」

と渋る私達も、まだあどけなさの残る小犬の顔を見ると心がほぐれ、新しい家族として迎え入れることに大賛成した。母の喜びは言うまでもなく、日々愛犬の世話としつけに明け暮れた。小犬もよく母に懐き、母だけでなく家中に明るい活気を与えてくれた。

しかし犬の時間は人のそれよりも早い。母にとっては「孫」だった小犬も「子」となり「友人」となり、今は「伴侶」の齢頃だ。いたわるようにゆっくりと歩む母と愛犬を見ていると、かなわなかった父との晩年を果たしているようだと思う。愛情は覚悟を伴うが、だからこそ今一刻を大切に心に記しておく。